

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 路 浩宇

論文題目 現代中国語における受身表現に関する研究  
—非典型的な事例を中心に—

### 論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	丸尾 誠
委 員	名古屋大学教授	柳沢民雄
委 員	名古屋大学准教授	勝川裕子

現代中国語の受身表現「NP<sub>1</sub>+“被、让、叫”+NP<sub>2</sub>+V+補足成分」(NP<sub>1</sub>は被行為者 (patient) を表す名詞フレーズ、NP<sub>2</sub>は行為者 (agent) を表す名詞フレーズ、Vは動詞) を構成する各要素の文法的特徴については、これまで数多くの著書や論文が研究の対象として取り上げてきた。例えば受身文の主語は「定」でなければならないとされ、この点は受身文と対称的な関係にある処置を表す「把」構文の目的語(対象物)が定でなければならないことから窺い知ることができるなど、他の文法事象との関連においても広く論じられてきた。しかしながら、次の(1)のように、不定名詞句が主語に用いられた例は珍しくない。

(1) 在昨天的枪击案中，一名妇女和一名 13 岁的中学生被打伤。

(新华社 2002 年 10 月份新闻报道)

[昨日の銃乱射事件では、女性一名と 13 歳の中学生一名が撃たれて負傷した。]

また、Vに目を向けると、王还(1983)や马真(1997)等は“被”構文における動詞は他動詞でなければならないと指摘しているものの、この点についてもコーパスでは、受身文の述語に自動詞が用いられるケースが見られる。

(2) 钢铁大亨发妻“被离婚”。 (新浪网)

[鉄鋼ボスの妻が「離婚を強えられる」。]

このように、実際の用例を観察してみると、先行研究において共有されてきた見解と一致しないケースは少なくなく、典型的な受身文とは異なる文法的特徴を有する受身表現が確かに存在することが分かる。本研究は、現代中国語における非典型的な受身表現について、その成立条件や動機付けを統語論、語用論、認知言語学などの立場から多角的に考察したものである。以下、論文の概要と評価について述べる。

### 【本論文の概要】

本研究の第1~4部では、受身表現を構成する主語、述語、(仕手)目的語、受身の標識などの要素における非典型的なタイプを中心に上げ、そのような用法が派生する動機付けについて、統語論、語用論的な観点から明らかにしている。続く第5部はそれまでの考察結果を踏まえ、受身範疇に見られる意味拡張のプロセス、および典型から非典型への連続性を考察したものである。

まず、導入部分となる序章では本研究の目的と方法について述べるとともに、「非典型的な受身文」を定義することにより、その考察の対象を明確にしている。

第1部(第1~3章)は受身文の主語(NP<sub>1</sub>)に特化して述べたものである。第1章では、主語に不定名詞句が用いられた受身文を取り上げ、その主語の機能によって特定の事象と不特定の事象を表す2つのパターンに分け、それぞれの統語的特徴と語用論的特徴が分析されている。この語用論的特徴については、不定名詞句が用いられた受身文は人の動作・行為や事物の変化に対してコメントするのではなく、環境・場面を全体的に捉えて描写すると同時に、事実を客観的に報道するという機能を有するものであると結論付けている。この結論を受けて、第2章では、事故・事件が報道される際の新聞やニュースという語用環境に着目し、情報の新旧という観点から不定名詞句が用いられた受身文が有する情報伝達機能に言及している。続く第3章では、発話者の「感情・視点・認識」の3点に反映された主観性という側面に着目し、無情物が主語となる受身文では、主観性の度合いが高い助詞“了”や大量の意味を表す数量表現等が用いられることによって、発話者の出来事に対する喜怒哀楽の感情が表されるようになる旨、統語事象と関連付けて述べている。

第2部（第4章～第7章）は他動性の度合いが異なる動詞（V）を受身文の述語に使用した場合の受容条件と容認性の程度を考察したものである。通常、受身表現で用いられるのは他動性の高い動詞であり、他動性の低い動詞は受身文の述語にはなれないとされている。しかしながら、近年では、他動性の低い動詞が用いられる受身文も頻繁に使用されるようになってきている。本研究では、受身文の成立条件とされる他動性の高い動詞が兼ね備える「動作性」と「結果性」という概念の果たす役割を明確にした上で、他動性の低い動詞はこの両概念を欠いているにもかかわらず、それが用いられる受身文が依然として成立する条件を統語論的な観点から検討している。また、インターネットで用いられる自動詞、名詞、形容詞といった非他動詞が述語となる受身文の形態的・統語的・意味的特徴を示し、このような表現が受身という範疇ではどのように位置付けられるのかを明らかにしている。

第3部（第8章、第9章）は、受身文で第一人称の仕手目的語が用いられる動機付けを考察したものである。第一人称はシルバースティーンの名詞句階層において、もっとも左側に位置付けられている。左側にある要素は一般的に発話の起点として、SVO構文における行為者にはなりやすいものの、受身文における“被”の後に置かれる行為者としてはもっとも捉えにくいものである。しかし、この指摘に反し、中国語の受身文においては、第一人称の“我”が支障なく仕手として用いられる。この“被我”が用いられた受身文では発話者が仕手と同一であり、「自己称揚」や「自己批判」といった発話者の主観的感情が前景化される。典型的な受身表現と比べて、仕手に第一人称が用いられる受身文の非典型性は、発話者が背景化された受動関係において、主観的感情を表すという側面に反映されることになる。

続く第4部（第10章）では、使役義との関連において、“让”構文と“被”構文の表す受動義の相異が明らかにされている。[-有生]、[-意志性]の意味特徴を有する名詞性主語が用いられる“让”構文では、動作の仕手となる名詞句（NP<sub>2</sub>に相当）が加えられない場合、受身のみが表される。一方で、NP<sub>1</sub>の後ろに働きかけを表す名詞性成分が挿入できる場合、使役と受身の意味をともに表し得るが故に、多義が生じる可能性がある。“让”構文が受身を表す場合、被害のほかに発話者の受け手に対する非難のニュアンスをも表すことになる。これはもっぱら受身を表すのに用いられる“被”構文には備わっていない語用論的な特徴であると言える。

第5部（第11章）では、プロトタイプ理論を援用して、本研究で取り上げた諸事例に見られる意味拡張を総括し、非典型的な受身の諸成員の間に見られる連続性の体系化を試みている。

非典型的な受身表現が使用される動機付けを解明する際には、それが用いられる発話環境という語用論的要因に加えて、「発話者の感情」を考慮する必要がある。従来の受身表現の研究においても「主観性」という認知メカニズムとの関連については指摘されてきたものの、非典型的な受身表現においては、この主観性が統語構造により強い影響を与えることになるものと結論付けている。

### 【本論文の評価】

現代中国語の受身表現（NP<sub>1</sub>+“被”+NP<sub>2</sub>+V+補足成分）を構成する各要素に関する意味的・統語的制約については、各種文法書においても言及されている。本論文はそうした制約に反しているにもかかわらず、当該の受身表現（本研究ではこのタイプを「非典型的な事例」と称する）が成立する状況およびその動機付けについて考察したものである。従来の受身文に関する先行研究では統語的観点からの考察に加えて、他動性という概念がその成立の重要な要因の1つとして論じられ

## 別紙 1 - 2

てきたが、本研究では主観性という発話者の認識を中心に据えた考察が著者（路浩宇氏）の主張の支えとなっている。こうしたアプローチをとる場合、ややもすれば抽象的な議論に陥りやすいものの、本論文では主張を裏付けるために随所で豊富な用例を用いて実証的に検証が行われている。

考察の対象となるポイントを「主語、述語、目的語、受身の標識」と大きく4つ（第1～4部）に区分した上で、それぞれを章（例えば、主語について述べた第1部は第1～3章から成る）に細分化するという論文の構成からは、各構成要素の文法的振る舞いを個別に深く掘り下げて徹底的に追究しようとする著者の意図がうかがえる（論文全体では序章と終章を除いて、第5部までである）。ただし、この細分化の故に、かえって各部ごとの独立性が際立つ結果となっており、この点、各部間の関係についても、各章間のケースと同様の関連付けが明確に感じられるよう、さらに配慮すべきであったと思われる。例えば第4部は受身の標識について述べたものであるが、ここでは“让”が“被”と異なり、受身義のみならず使役義を表すことができるという言語事象に着目して、これを非典型というカテゴリーで捉えるものである。“让”のもたらす両義の分化に対する共時的な考察自体は有意義ではあるものの、これを受身文の非典型例と見なす根拠が少々希薄であり、各構成要素に対する考察という本研究の主流からやや逸脱している印象は払拭できない。

また考察の際には、一般言語学の概念を取り入れ、本研究成果が中国語の独自性を示すものであることを明示する一方で、他言語との関連を見据えたより普遍的な原則に組み入れようとする姿勢は評価に値する。そうした点では、第1部で扱った不定名詞句が主語に用いられる事象についても、定（definite）・不定（indefinite）および特定（specific）・不特定（non-specific）という概念をもう少し厳密に適用すべきであるといった不備が審査員から指摘された。

こうした問題点は見られるものの、本論文は従来の先行研究では個別には指摘されてきたものの、体系的には捉えられてこなかった周辺の受身に関する言語事象に目を向け、より包括的な受身範疇の確立を目指した点に、その独創性を見出すことができる。例えば第一人称が動作の仕手となった“被我～”[私によって（～される）]を用いた受身文などは中国語母語話者にとっては卑近な表現であるものの、日本人中国語学習者にはその発想が独特であるが故に運用が困難なものであり、本論文の研究成果は今後の中国語教育・教授法の改善にも貢献しうるものだと言える。

以上の評価に基づき、審査委員は全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。